

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020 年 1 月

「闘争と勇氣」「聖所（Ⅱ）」「もう一つの声」「ゆず巻き大根」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

聖所 (Ⅱ)

4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇気

7

Conflict and Courage

現代の真理

「もう一つの声」

39

神の栄光ともう一つの声

力を得るための食事

「ゆず巻き大根」

46

レシピ

お話コーナー

「ピラトによる有罪宣告 (Ⅰ)」

48

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2019年11月24日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: iStock on Front page, Sermon View on page 40

従順な子供として、聖なる者に

「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造…(ろ)う』。神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」(創世記 1:26、27)

「似たもの同志が理解し合えるのである。」(祝福の山 31)

「似た者は似た者に惹かれる。似た者は似た者を正しく評価する。聖潔はそれ自体聖潔と、信仰は信仰と相結ぶ。…彼らの霊はキリストの霊と同化し、彼らはこのお方と一つになることを切望する。」(教会への証 5 巻 705)

「キリストを愛し、キリストに倣い、まったくキリストに頼ってこそ、わたしたちはキリストのみかたちに変えられるのである。」(キリストへの道 95)

「神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。」(創世記 2:2,3)

「あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。これはわたしとあなたがたの間の、代々にわたるしるしであって、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである。」(出エジプト記 31:13)

「あなたは自分の足をみ言葉の真上に置き、わたしは信じるといわなければならない。わたしは信じる、わたしは賞与を目指して走り、わたしを妨げるものは一掃すると。わたしは自分の魂と神の間にさしはさむものを何も許さない。(説教と講和 1 巻 309)

安息日は、神とその民の間に存在する関係のしるしである。このお方の律法を尊ぶというしるしである。それはこのお方の忠実な臣民と違反者とを区別する。」(クリスチャンの奉仕 261)

「安息日をきよく守る人々にとってこれは聖化のしるしである。」(同上)

「従順な子供として、…あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』と書いてあるからである。」(ペテロ第一 1:14-16)

第14課 聖所(Ⅱ)

年毎の奉仕(レビ記第6章参照)

日と週が過ぎ、毎年、毎年の終わりには、地上の聖所は象徴的に罪と汚れが移されることによっていっぱいになりました。

神のご計画は、日々の奉仕において表されていたように罪を許すばかりでなく神の民を罪から分離し、ついには罪と罪の創始者を滅ぼすことでした。このことは、年毎の奉仕に表わされていました。信仰によって人々は、この裁きの働きが、天において日毎と年毎の奉仕の両方を通して進められていることを知るべきです。キリストの生涯と死は、日毎の奉仕の中で実行されていたように、この計画の最初の部分を成就しました。これに対し、その計画における最後の部分は、わたしたちの時代—贖罪の日—に成就されることになっています。ユダヤ歴の第七の月の十日になされる年毎の聖所の清めは(レビ記 16:29, 30)、ダニエル 8:14 における預言の成就でした。毎年、聖所を清める日であり、ユダヤのカレンダーにおいては、(レビ記 16:29, 30)「7月の10日」でした。その日は、ダニエル章 8:14 により預言されていました。この年毎の奉仕の最も重要な点は以下のものでした。

その祭では、大祭司だけが至聖所における清めの儀式を行いました。それも自分と自分の家族のために贖罪をした後においてのみ、その儀式を行うことができました。大祭司は、天の聖所におけるイエスの働きと務めを象徴していました(ヘブル 8:1, 2)。

すべてのイスラエル人は、「贖罪の日」のために準備をしなければなりません(レビ記 23:29)。すべての罪は告白されて聖所へ移されなくてはなりませんでした。それは彼らの罪が最終的に滅ぼされるための準備でした。

大祭司が、彼とその家族のためのあがないをした後、幕屋に二頭のやぎが連れてこられ、くじが引かれました。第一のやぎは主のためのものであり、二頭目はアザゼルでした(レビ記 16:5-8)。

a) 主のためのやぎは殺されました。大祭司は血をとって、至聖所の中に贖罪所の前でその血をふりかけました(レビ記 16:15)。一年に一度、ユダヤ民族の積み重なった罪を意味していたその血は(ヘブル 10:3)、大祭司が(罪を負う方として)運び入れ、神の贖罪所の前におきました。こうして、聖所をその汚れと罪から清めたのでした。

聖所があがなわれ、すなわち罪から清められた後、罪は滅ぼされました。

アザゼル：大祭司は象徴的に中の部屋から罪を運び出し、聖所の門にいるアザゼルのところに歩いて行きました。アザゼルの頭の上に手をおき、大祭司はすべての民の罪を告白しました(レビ記 16:10, 20, 21)。これにより、記録されたすべての罪は、アザゼルへ移されました。これは、裁きが完了し、すべての人の判決が決定した後になされました。

「アザゼル」とよばれるそのやぎ(スケープゴート)は、しかるべき人によって荒野へと運ばれ、そこでさまよい死ぬのでした。これにより罪は、永久に聖所と神の民から分離するのでした(レビ記 16:21, 22)。

この毎年裁きの日は象徴的なものであり、最終的な裁きと罪の破壊を指し示していました。

大祭司が聖所から罪を取り除き、その罪をアザゼルの頭の上で告白したように、キリストは告白されたすべての罪を、サタン、すなわちあらゆる罪の創始者であり扇動者である者の上におかれます。アザゼルは、イスラエルの罪を負って、「人里離れた地」へと送られました(レビ記 16:22)。同様に、サタンは自分が神の民に犯させたすべての罪の責任を負って、1000年の間、地上に閉じ込められます。そのとき、その地は荒涼として人がいません(黙示録 20:1-3)。

イスラエルでは、贖罪の日は、年毎の裁きの日であるとみなされていました。もし、ある人が欠席したり、または参加することを拒むならば、その人は神の民から切り離されました(レビ記 23:27-29)。

「しかし、彼は永遠にいますかたであるので、変わらない祭司の務めを持ち続けておられるのである…彼は、他の大祭司のようにまず自分の罪のため、次に民の罪のために日々、いけにえを捧げる必要はない。なぜなら、自分を捧げて、一度だけそれを捧げたからである。」(ヘブル 7:24, 27)。

「ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所

に入らないで、上なる天に入り、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである…しかし事実、ご自身をいけにえとして捧げて罪を取り除くために、世の終わりに一度だけ現れたのである。そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが人間に定まっているように」(ヘブル 9:24, 26, 27)。

荒野での幕屋における儀式や、後にそれにとってかわった宮の務めにおいて、人々は一年の間毎日キリストの死に関する偉大な真理を教えられました。その後、毎年一回、彼らの思いは、キリストの奉仕と、キリストとサタンの大争闘の終わりの出来事、またその後の最終的な全宇宙の罪と罪人からの清めへと運ばれたのでした。

「神よ、あなたの道は聖所にあります。われらの神のように大いなる神はだれか。」(詩篇 77:13 英語訳)。

闘争と勇気

Conflict and Courage



1月

1月1日

励ましを受けるために

「これまでに書かれた事がらは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである。」(口マ 15:4)

聖書に記録されている生涯は実在の個人個人についての本当の歴史である。アダムから使徒の時代までの連綿と続く各世代を通じて、実際に起ったこと、また実在する人物の真の経験についてはっきりとした消えてしまわない記述がわたしたちにはある。靈感を受けた歴史が、良い人々の生涯で彼らの品性を汚す事実を述べているということは多くの人にとって不思議に思える。……靈感を受けた筆者は人間のもろさや失敗を記録することによって、曇らされている聖なる歴史の各ページに先手を打つために偽りを証言したりはしなかった。……

真理がないがしろにされたり、その主要な特質に対する罪が隠されたりしないというのは、聖書が真正なものであるという最高の証拠の一つである。……その日常生活や教会関係で、汚点のない純潔の模範として輝く過失のないクリスチャンについてどれほど多くの伝記が書かれていることか。しかし靈感の筆が彼らの生涯を書いたなら、どれほどの違いがあらわれてくることであろうか。そこには人間の弱さ、利己心や頑迷、自信、隠れた罪との苦闘が、また霊と肉との絶え間ない戦いがあらわにされている。……

もしもわたしたちの聖書を靈感を受けない人々が書いていたなら、聖書は非常に違った様相を呈し、誤ちを犯す有限な者、生来のもろさやずる賢い敵の誘惑に苦勞している人間にとって失望する研究となっていたであろう。しかし実情は、わたしたちには聖書の歴史の中で記されている人物の宗教経験について正しい記録がある。神の恵みを受けた人々、神が大きな責任を委ねた人々は時々誘惑に負け、罪を犯した。現代わたしたちが戦い、動揺し、たびたび過ちに陥るのと同じである。しかし神の恵みによって彼らが自分の悪い性質を克服するために新しい活力を得ることができたということを知るのは意気消沈している心を勇気づける。このことを覚えてわたしたちは自分自身との戦いを新たにする用意ができるのである。(教会への証 4 卷 9 ～ 11)

希望がある

「これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。」(コリント第一 10:11)

古代イスラエルのつぶやきや反抗的な不平、また同様に彼らのためになされた力強い奇跡や彼らの偶像礼拝や忘恩に対する罰が記されているのはわたしたちの益のためである。古代イスラエルの例が、神の民に対する警告として与えられている。それは不信を避け、神の憤りをのがれることができるためである。もしヘブル人たちの罪が神聖な記録から除外され、彼らの美徳だけが列挙されていたなら、彼らの歴史はわたしたちに教えるはずの教訓を与えることはできなかったであろう。……

もしも神の民が自分たちに対する神の取り扱いを認め、この方の教えを受け入れるなら、自分たちの足のための真直ぐな道と、暗闇と失望を通して自分たちを導く光を見つけるであろうに。ダビデは自分に対する神の取り扱いから知恵を学び、へりくだって至高者の懲らしめを受けた。預言者ナタンによって自分の真の状態を忠実に描写されたことは、ダビデが自分自身の罪を知り、それを捨てる助けとを示している。彼らは永遠の命を受け継ぐために、ただ神の勧告に従い、そのみ旨を行わなければならない。神は過ちを犯す民のために彼らの罪を示されるが、それは天来の真理の光のもとでその罪がすべて大罪であることを見ることができるためである。それからその罪を永遠に放棄することが彼らの義務である。

神は、父祖の時代やダビデ、預言者、使徒の時代と同様、今日においても罪から救うのに力強い方であられる。聖史の中で神がご自分の民を彼ら自身の罪から救い出された数多くの事例により、現代のクリスチャンは真剣に神の指示を受け、審判の厳密な調査に耐えるような品性を完成するために熱心になるべきである。(教会への証 4 巻 11 ～ 15)

1月3日

群れの中の場所

「正しい者のくちびるは多くの人を養い、愚かな者は知恵がなくて死ぬ。」(箴言 10:21)

罪惡がはびこってはいたが、神との交わりによって、高められ、気高くされ、天の交わりのような生活を送った聖徒の群れが常にあった。彼らは著しい知能と、すぐれた学識の持ち主であった。彼らには、正しい品性を築き、信心について、その時代の人々だけでなく、後世の人々にも教えるという偉大で清い使命があった。聖書には、最も著名な人々のなかのごくわずかな人しか記録されていない。しかし、神は、各時代を通じて、忠実な証人、誠実な礼拝者をもっておられた。(人類のあけぼの上巻 80)

自分自身はどんなに無力でも、神のみ言葉に信頼するときに全世界の勢力に対抗し得た例は少なくない。純潔な心の持ち主で、聖なる一生を送ったエノクは、信仰を強く保って、腐敗とあざけりに満ちた世代に対して義の勝利を納めた。ノアとその家族は当時の人々―最も偉大な知力と体力を持ちまた道徳的に最も墮落した人々に対抗した。紅海に臨んだイスラエルの民は、おびえた無力な奴隷の群れであったが、地球上で最大の国家の軍勢に対抗した。神から王位を約束されていた羊飼いの少年ダビデは、国王としての権力をかたく握って離さないサウルに対抗した。燃える火の中のシャデラクとその仲間、王座のネブカデネザルに、ししの群れの中のダニエルは王国の高い地位にある敵どもに、十字架上のイエスは、ローマの総督にさえ自分たちの意志を強行させようとするユダヤの祭司や役人たちに、鎖につながれて罪人として処刑されたパウロは世界帝国の暴君ネロに、それぞれ対抗したのであった。

このような例は、聖書だけに見られるとはかぎらない。人類の進歩の歴史にはどこにでもこのような例がたくさんある。ワルデンセスやユグノー教徒、ウィクリフやフス、ジェロームやルーテル、チンダルやノックス、チンツェンドルフやウェスレーその他多くの人々が悪を支持する人間の権力や政治に対して神のみ言葉の力を立証したのである。こういう人々こそ世の真の貴族である。彼らこそ世の王統である。今日の青少年たちは、この王統の一族となるように召されているのである。(教育 300、302)

実とは何か

「不義を耕し、害悪をまく者は、それを刈り取っている。」(ヨブ 4:8)

聖書の中で、教育上最も価値のある部分はその伝記である。これらの伝記は、絶対にありのままの生活を描いてある点において他の伝記と類を異にしている。有限な人間の頭脳では、他人の行為を、何から何まで、正しく解釈することはできない。人の心を読み、動機と行為のかくれた源を見分けられる神よりほかには、だれも絶対にまちがいがなく品性を描くことも、人生のありのままの姿を伝えることもできない。このような描写はただ神のみ言葉である聖書の中にだけみられる。聖書に、行為は人格のあらわれであると教えられているが、これほどはつきりした真理はない。人生の経験の大部分は、われわれ自身の思想や行為が実を結んだものである。

「いわれののないのろいは……止まらない。」(箴言 26:2)「正しい人に言え、彼らはさいわいであると。……悪しき者はわざわいだ、彼は災をうける。その手のなした事が彼に報いられるからである。」(イザヤ 3:10,11)「地よ、聞け。見よ、わたしはこの民に災をくだす。それは彼らのたくらみの実である。」(エレミヤ 6:19)

これは恐るべき真理で、深く心に刻みこまなければならない。どんな行為もかならずそれをなした本人自身の上に帰って来る。自分の一生に災いを及ぼしている悪は、自らまいた種が身を結んだものであることを、人は認めないわけにはいかない。しかしそうであっても、望みがないわけではない。

ヤコブは詐欺行為をしたために兄の憎しみという収穫を刈りとった。かれ自身は、二十年の間異郷の地にあって、虐待され、欺かれた。……しかし神は「わたしは彼の道を見た。わたしは彼をいや」すと仰せになる(イザヤ 57:18)。ヤコブは、苦難の中にあつくじけなかった。彼は悔い改め、兄への罪を償うために努力した。そして、エサウの怒りのために殺される危険を感じたときに、神に助けをもとめた。……「彼は天の使と争って勝ち、泣いてこれにあわれみを求めた。」(ホセア 12:4)。「その所で彼を祝福した」(創世記 32:29)。……彼自身の中にある悪の力はうち破られ、彼の品性は一変した。……神は、ご自身の法律を取り消すようなことはなさらない。神は律法に反して行動するようなことはなさらない。神は罪の働きを白紙にかえすようなことはなさらないが、しかしそれを一変させたものである。神の恩恵によって、災いは福となるのである。(教育 164～166)

1月5日

神のかたちに

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」(創世記 1:27)

地球が数多くの動物と植物で満たされてから、創造主のみわぎの冠であり、この美しい地球に住むのにふさわしい人間が活動の舞台にのぼってきた。人間は見渡すかぎりのものを統治する支配権が与えられた。……

神はここに人類の起源を明瞭に述べられた。聖書の記録は、誤った結論を出す余地がないほど明白である。神はご自分のかたちに人間を創造された。そこにはあいまいさが全然ない。動物や植物などの下等な生命形態から、次第に発達した段階をたどって、人間は進化したのだと想像する余地は全くない。こうした考え方は、創造主の偉大なわざを、人間的な狭い、地上的な考え方のレベルに引き下げる。人間は、宇宙の王座から神を追い出そうと努める結果、人間自身の品位を低め、人間の崇高な起源を見失っている。星空を高くすえ、野の花を巧みに飾り、み力の奇跡によって驚くべきものを天地の間に満たされたおかたは、その輝かしいみわぎの最後を飾るにあたって、人間をこの美しい世界の統治者としておたてになったが、それは生命の賦与者のわざに恥ないものであった。靈感によって与えられた人類の系図は、その起源を、細菌、軟体動物、四足獣などの進化の跡をたどるのでなくて、偉大な創造主に帰着させる。アダムは、土のちりで作られたが、「神の子」であった。……

彼の性質は、神のみ旨と調和していた。人間の知力は、神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった。彼は、神のかたちをしていて、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福であった。(人類のあけぼの上巻 18～20)

アダムの背たけは今日の地上の人間の二倍もあり、よくつりあいがとれて、容姿は申し分なく美しかった。……エバは、アダムほどには背が高くなかった。エバの顔がアダムの肩からすこし出る位の高さだった。エバもまたりっぱで申し分がなく、均斉がとれて非常に美しかった。罪というものを全く知らないこのふたりは、手で作った衣を身にまとっていなかった。彼らは、天使たちと同じように、光と栄光をもって身体をおおわれていた。(生き残る人々 32)

エデン

「主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。」(創世記 2:15)

神のおつくりになったものは、すべてが申し分なく美しかった。神がおつくりになったこの地上には、アダムとエバを幸福にするために、何一つとして欠けたものはないようにみえた。しかしそれでもなお神は、彼らに対する大いなる愛のあらわれとして、特に彼らのために園を設けたもうた。彼らは園の手入れに楽しく働いたり、天使たちの来訪をうけて、その教えをきいて楽しく瞑想したりなどして時間を送るのだった。彼らの労働は疲労するようなものではなく、楽しくて生气づけられるようなものだった。この美しい園が、アダムとエバの住居になることになった。この園の中に、神は、有用で美しいいろいろな種類の木をお植えになった。そこには、聖なるふたりの食物として神のおつくりになった、かおりの高いおいしい味の、見た目にも美しいりっぱな果実をいっぱいにつけた木々があった。そこにはまっすぐに伸びた美しいつる状の木があって、人類の墮落後にみられるものとはちがった果実を枝もたわわにつけていた。その果実は大きくて、黒みがかかった色、紫色、赤色、薄赤色、薄緑色など、いろいろな色をしていた。このつる状の木の枝になる美しいりっぱな果実は、ぶどうと呼ばれた。ぶどうの木は、棚でささえられてはいなかったが、地面にはうくともなく、ただ果実の重さで枝がたれていた。ぶどうの枝で美しいあずまやをつくったり、かぐわしい果実をつけた自然の美しい生きた木々や枝葉を仕立てて住居をつくったりすることは、アダムとエバにとって楽しい働きだった。(生き残る人々 32,33)

人が神の造られたもののめんどろを見る仕事の中に幸福を見いだすこと、彼の必要が園の木の果実で満たされることが神のご計画であった。……

何もしないことに幸福があるならば、人は清らかな状態のない、罪のまま何の仕事も与えられなかったであろう。だが人を創造されたおかたは、彼の幸福のためには何がよいかを知っておられ、彼を造られるとさっそく定まった仕事をお与えになった。将来の栄光の約束と、人は日々のパンのためにほねおって働かなければならないというご命令とは、どちらも同じみくらから出たものであった。(アドベンチスト・ホーム 17,18)

1月7日

選ぶ機会

「しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きつと死ぬであろう。」(創世記 2:17)

われわれの祖先は、罪なく清いものに造られたが、罪を犯す可能性がなかったのではない。……彼らは、神と聖天使たちとの交わりを楽しむことになっていた。しかし、彼らが永久的に確実なものとされる前に、彼らの忠誠が試みられなければならなかった。人間の存在の当初から、サタンを墮落させた致命的欲望、すなわち、放縦に対する欲望に一つの制限がおかれた。園の中央にあるいのちの木の近くに善悪を知る木があって、われわれの祖先の服従と信仰と愛を試験するものとなっていた。彼らは、ほかのどの木の実も自由に食べることが許されていたが、これは食べることを禁じられていて、その罰は死であった。彼らは、また、サタンの誘惑に会わなければならなかった。しかし、もしその試練に耐えるならば、彼らは、ついに、サタンの力の圏外に置かれ、神の永遠の恵みにあずかることができるのであった。……

神は、神の律法を犯す力のないものとして人間を造ることもおできになった。また、アダムの手が禁果にふれないように、彼の手をおさえることもおできになった。しかし、それでは、人間は道徳的自由意志の持ち主ではなくて、単なる機械人形になってしまう。選択の自由がないと、彼の服従は自発的なものではなくて、強制されたものとなる。品性が啓発されることもあり得なかったであろう。……人間は知的存在者としての価値を失い、神の支配は専制的だというサタンの非難が正当化されたことであろう。

神は、人間を正しいものに造られた。神は、人間に悪の傾向のない気高い品性をお与えになった。神は、彼に高い知的能力を与え、神に対して忠誠を尽くさせるために、最も強力な示唆をお与えになった。完全で永続的な服従が、永遠の幸福の条件であった。人間は、こうした条件のもとにあって、いのちの木に近づくことができた。……

彼らが神の律法に忠誠をつくしているかぎり、知って理解を深め愛する彼らの能力は、絶えず啓発されるのであった。彼らは、常に新しい知識の宝庫を手に入れ、新しい幸福の泉を発見し、神のはかり知れない不滅の愛について、ますます、明瞭な観念をいだくようになるのであった。(人類のあけぼの上巻 24～27)

分かちあうための人

「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。」(創世記 2:18)

アダムが創造されたあとで、彼に名をつけてもらうために、すべての生物が、彼の前につれてこられた。彼はどの動物も対になっているのを見た。しかし、それらの中には、彼に「ふさわしい助け手が見つからなかった」。神が、地上で創造なさったすべての生き物の中には、人間にふさわしいものはいなかった。また神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」(創世記 2:20,18)。人間は孤独な生活をするように造られたのではない。彼は、社交的な存在でなければならなかった。もし伴侶がなければ、エデンの美しい光景も、愉快な労働も、完全な幸福を与えることはできなかったことであろう。天使たちとの交わりでさえ、同情と伴侶を求める彼の願望を満足させることはできなかった。愛し愛される同じ性質のものがいなかったのである。

神ご自身が、アダムに伴侶をお与えになった。神は、「彼にふさわしい助け手」すなわち、彼にちょうど合った助け手、彼の伴侶となるにふさわしく、彼と一つになって、愛し、同情することができる者をお与えになった。エバは、アダムのわきから取られたあばら骨によって創造された。このことは、彼女がかしらになって彼を支配するのでもなければ、彼よりは劣った者として彼の足の下に踏みつけられるものでもなく、同等のものとして、彼のかたわらに立ち、彼に愛され、守られるものであることを示している。男の一部分、彼の骨の骨、彼の肉の肉として、彼女はアダムの第二の自分であった。そしてこの関係には、密接な結合と深い愛情がなければならないことを示された。「自分白身を憎んだ者は、いまだかつて、ひとりもない。かえって、……おのれを育て養うのが常である。」「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」(エペソ 5:29、創世記 2:24)。

神は、最初の結婚をとり結ばれた。だから、結婚式の制定者は、宇宙の創造主である。「結婚を重んずべきである」(ヘブル 13:4)。それは、神が人間にお与えになった最初の賜物の一つであった。また、それは、墮落後、アダムが楽園の門から持って出た二つの制度のなかの一つである。婚姻関係に関する神の原則をわきまえ、それに従うときに、結婚は祝福である。それは、人類の純潔と幸福を守り、人間の社会的必要を満たし、肉体的、知的、道徳的性質を高める。(人類のあけぼの上巻 20、21)

1月9日

欺かれた

「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか。」
(創世記 3:1)

創造の最高のわざである人間に、神はご自分の要求を認めて、その律法の義と慈愛と、そして人間に対する律法の神聖な要求を理解する能力をお与えになった。人間にはゆるがない服従が要求されているのである。

天使と同様に、エデンの住人には試験期間が与えられていた。彼らの幸福な地位は、創造主の律法に忠実に従うという条件だけによって保つことができた。彼らは、服従して生きるか、それとも服従しないで滅びるかのどちらかであった。

.....

園の中で毎日の仕事をするときに、夫のところから離れないようにと、天使はエバに注意した。彼女が夫といっしょにいるときは、ひとりであるときより誘惑に陥る危険が少なかった。しかし、エバは楽しい仕事に夢中になって知らず知らずのうちに夫のそばから離れていった。……彼女は……まもなく、好奇心と賛嘆のまじった思いで禁じられた木をながめていた。その実は、非常に美しかった。彼女は、なぜ神がこれを禁じられたのかと疑問を抱いた。それが、誘惑者の待っていた機会であった。彼は、彼女の心の動きを読み取ることができるかのように、彼女にいった。「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」……

「神の警告は、実際にその通りに成就するものではなくて、ただの威嚇にすぎないのだ」と彼はほのめかした。……

こうした方法で、アダムの時代から現在にいたるまでサタンは働き続け、大成功を収めている。彼は、人を誘惑して、神の愛に頼らず、神の知恵を疑わせるのである。彼は、不信心な好奇心を刺激し、神の知恵や力の秘密を探ろうとする際限のないせんさく心をかきたてようと常に努力している。多くの者は、神がみこころのうちに隠されたものを捜し出そうと努めて、神が、啓示された真理で、救いに欠くことのできないものを見落としている。……

エバは、サタンの言葉をほんとうに信じた。しかし、エバがそう信じたからと言って、罪の刑罰をまぬかれることはできなかった。エバは、神のみことばを信じなかった。そして、それが、彼女を墮落させたのである。人間は、審判のときに、偽りを本気で信じたからではなくて、真理を信じないで、真理を学ぶ機会をのがしたために罪に定められる。(人類のあけぼの上巻 38 ～ 42)

サタンに用いられる

女は「その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので彼も食べた。」(創世記 3:6)

罪を犯したエバは、サタンにかわって夫を破滅させるために働く者になった。エバは、なんとも言えない異常な興奮状態に陥り、禁じられた木の実を両手に持って、夫をさがし、起こったことのすべてを話した。悲しい表情がアダムの顔にあらわれた。彼は、驚きおびえたように見えた。エバの話聞いて、これはわれわれが警告を受けていた敵にちがいないと彼は答えた。また彼は、エバは神の宣告によって死ななければならないと言った。彼女はそれに答えて、死ぬことはないと言ったへびの言葉をくりかえして、彼に食べるようすすめた。エバはそれをほんとうだと思った。というのは、自分は神の怒りのしるしを何も感じないし、むしろ、気分を爽快にして、引き立たせ、からだ中が新しい命におどるように思われ、天使も、このように力づけられているのかとエバは想像したからである。アダムは、エバが神の命令にそむき、彼らの忠誠と愛の試練として課せられたただ一つの禁令を犯したことを知った。彼の心に恐ろしい苦闘が起こった。彼は、エバを、自分のそばからさまよい出るままにしておいたことを悲しんだ。しかし、それはもう取りかえしがつかなかった。彼は、交わりを楽しんでいた彼女から別れなければならなかった。どうして、それに耐えることができよう。

アダムは、神と天使たちとの交わりを楽しんでいた。彼は、創造主の栄光を見たのであった。もし、人類が神に忠実であったならば、彼らにはどのような輝かしい運命が開かれるかを彼は知っていた。しかし、彼は、他のあらゆるもの以上に尊いものと思っていた賜物を失うことを恐れて、こうしたすべての祝福について考える余裕がなかった。創造主への愛、感謝、忠誠心などのすべては、エバに対する愛の大きさには比べることができなかった。彼女は、彼自身の一部で、別れるなどとは考えてみることもできなかった。……彼は、彼女と運命を共にする決心をした。彼女が死ななければならないならば、彼もいっしょに死のうと思った。結局、賢いへびの言葉がほんとうではなかろうかと彼は考えた。エバは、不従順の行為の以前と同様に美しく、見たところなんの罪もないかのように、彼の前に立っていた。彼女は、前よりは大きな愛を彼にあらわした。死の徴候は、彼女にあらわれていなかった。そこで、彼は、成り行きにまかせる決心をした。彼は、実を取ってすばやく食べた。(人類のあけぼの上巻 42 ～ 45)

知らない方が良い時

「わたしは心をつくして知恵を知り、また狂気と愚痴とを知ろうとしたが、これもまた風を捕えるようなものであると悟った。」(伝道の書 1:17)

アダムとエバは共に果物を食べ、そしてある知識を得た。それは神に従っていれば、決して持たなかったであろう知識である。それは、神への不従順と不忠実の経験、自分たちは裸であるという知識であった。無垢の衣、彼らを包んだ神からの覆いは取り去られた。そして彼らは腰を覆うためイチジクの葉を縫い合わせることによって天の衣の代用とした。

これは、神の律法の違反者たちがアダムとエバの不従順の日から使っている覆いである。……

しかし罪人の裸は覆われない。……

アダムとエバが創造主に背かなかったならば、もし彼らが完全な公正の道に留まっていたならば、彼らは創造主を知り、理解することができたであろう。しかし、彼らが誘惑者の声を聞いて、神に対して罪を犯したとき、天の無垢の衣の光は彼らを離れた。そして無垢の衣を手放して、彼らは神に対する無知の衣をまとった。今まで彼らを囲んでいた明確な、そして完全な光は、彼らの周囲をすべて明るくしていた。しかし、その天の光を奪われているアダムの子孫は、もはや神の造られた御業に表された神の品性をたどることができなくなった。(SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホト・コメント] [E・G・ホト・コメント] I 巻 1084)

もしアダムとエバが禁じられた木に触れていなかったなら、主は彼らに知識—罪の呪いに基づいていない知識、彼らに永遠の喜びをもたらしたであろう知識—を与えたであろう。

各時代を通じて、人々は好奇心をもって善悪を知る木を探し求めてきた。そして、しばしば彼らはソロモンのように、最高に価値のある木の実を手に入れたと考える。ところが、神の都の門を開く神聖な真の科学と比較すれば、それが全く無駄であると悟るのである。人間の野心は、栄光と自己賞揚と支配権を彼らにもたらしよう知識を探索してきた。こうしてアダムとエバは、サタンにあやつられた。(SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホト・コメント] [E・G・ホト・コメント] I 巻 1083)

のろわれた!

「女に言われた、『わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。……それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう』。更に人に言われた、……地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。」(創世記 3:16,17)

エバは、これから会わなければならない悲しみと苦痛を知らされた。……神は創造のときに、彼女をアダムと等しいものに造られた。もし彼らが神に従って、その偉大な戒めに調和していたならば、彼らは、互いに調和しあってきたはずであった。しかし、罪が調和を破った。だから、一方が他方に従属することによって彼らの一致と調和が保たれるようになった。エバは最初に罪を犯した。彼女は、神の命令に反して、夫のそばを離れたために、誘惑に陥った。また、アダムは、彼女のすすめによって罪を犯した。そこで、彼女は、夫に従う立場におかれた。……

エバは、エデンの家庭で、夫のそばにいて、完全な幸福を味わっていた。しかし、落ちつきを失った現代のエバたちと同様に、彼女は、神がお定めになったところより、もっと高い身分になりたいと望むようにそそのかされた。彼女は、初めに置かれた地位より高く昇ろうとして、それよりはるか下に落ちた。神のご計画に従って、実生活の義務を快く果たそうとしない者は、みな同様になる。神がお与えにならなかった地位を得ようと努めて彼らが祝福となることのできる場所をあける者が多い。……

神は人間を創造なさったときに、彼を地とすべての生き物の統治者にされた。アダムが、天の神に忠誠をつくしていたかぎり、自然全体は彼に従っていた。ところが、彼が神の律法にそむいたとき、下等の被造物は、彼の統治にそむいた。こうして、主は、その大きな慈悲をもって、神の律法の神聖さを人間に示し、彼ら自身の体験によって、ささいなことにおいても、律法の無視がどんなに危険であるかを悟るようにされた。

このとき以来、艱難辛苦の生活が人間の運命になったが、これは愛のゆえに定められたものであった。これは罪の結果、人間に必要な訓練であって、食欲と情欲の放縦を防ぎ、克己の習慣を発達させるためであった。これは、罪の滅びと墮落から人間を回復する神の大計画の一部であった。(人類のあけぼの上巻 47～49)

1月13日

自然の教え

「しかし獣に問うてみよ、それはあなたに教える。空の鳥に問うてみよ、それはあなたに告げる。あるいは地の草や木に問うてみよ、彼らはあなたに教える。海の魚もまたあなたに示す。これらすべてのもののうち、いずれか主の手がこれをなしたことを知らぬ者があろうか。」(ヨブ 12:7～9)

地は罪ののろいにそこなわれたとはいうものの、自然はなお人類の教科書となるべきであった。自然はもう恩恵だけを表わすことはできなくなった。いたるところに悪が存在し、地も海も空気もそのけがれた手にふれて毒されている。……

しばむ花に、散る木の葉に、アダムと妻は、衰えというもののきざしを初めてまのあたりに見た。すべての生物はやがて死ななければならないというきびしい事実が、彼らの心にはつきり迫ってきた。彼らの生命をささえている空気さえ、死の種がひそんでいた。

彼らはまた自分たちの失った支配権をたえず心に思い出した。人間よりも下級な被造物の中にあつて、アダムは王としての立場にあつた。彼が神に忠誠心を保っていた間は、自然界の万物は、彼の統治に従っていた。しかし彼が神の戒めにそむいたときに、この統治権は失われた。アダム自身によってこの世界にもたらされた反抗心は、動物界にまでひろがった。……

しかし人は自ら選んだ罪の結果の中に捨てられたままでおかれなかった。サタンに対する宣告の中には、救済の暗示が含まれていた。……この宣言は、アダムとエバにも聞こえるように告げられ、それは、彼らへの約束となった。彼らは、自分たちが経験しなければならないいばらやあざみのことや、労苦や悲哀のことや、土に帰らなければならないことなどを聞く前に、希望を与えずにはおかない約束の言葉をきかされた。サタンに屈服したために失われたすべてのものは、キリストによって再びともどされることができるようになった。(教育 17,18)

アダムの違反の後に、神はすべての開きつつあるつばみと咲きつつある花を、あるいは自分たちの嗅覚を楽しませる香りを破壊することができた。呪いによって焦がされ、そこなわれた地上にあつて、いばらやあざみ、とげや毒麦のうちに、我々は罪の宣告の法則を読むことができるが、花の精密な色と香りのうちに、神がなお我々を愛され、神の慈悲は地球から完全に取り去られてはいないことを学ぶことができる。(SDA パイブル・コメント [E・G・ホット・コメント] 1 巻 1085)

神と人の間に

「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。」(ヘブル 7:25)

主は、忠実で真実を尽くしていたアダムに置いていた信頼を、墮落して不従順なアダムには置かれなかった。……天の報いは違反者には与えられなかった。

アダムとエバの目は本当に開かれたが、何に対してであろうか。自分自身の恥と破滅を見るために、また彼らの保護をしていた天来の光の衣が、もうこれ以上保護手段として自分たちの身の周りにはないことに気づくためであった。裸は罪を犯した実であることを知るために彼らの目は開かれた。園で神のみ声を聞いた時、彼らは神から身を隠した。それは、彼らが墮落するまで知らなかったこと、すなわち神の非難を予想したからであった。……

人の唯一安全な手段は神のみ言葉に完全に従うことであると神は宣言しておられた。わたしたちは悪い行動を取って、その結果もすべて経験すべきではない。こうすると不従順を通じて弱くなる。神のご計画は人にその働きすべてに対するはっきりとした視力を与えることであった。……

人と神との間に協力がなければならなかったが、この計画はアダムが罪を犯すことによって大いに妨げられた。サタンはアダムが罪を犯すよう導いた。そして主はアダムが罪を犯した後は、罪を犯す前のように彼は彼と伝達されないのであった。

アダムが墮落した後キリストはアダムの指導者となられた。キリストは人類を即刻の死から救うために、人類に対して神の代理として行動し、仲保の働きを引き受けられた。アダムとエバは自分たちの忠誠を再び回復するために猶予期間が与えられた。そして彼らの子孫はみなこの計画の中に含まれるのであった。(手紙 91、1900 年)

神の御子の贖いがなければ、神から人へ祝福や救いが伝わるのは不可能であった。神はご自分の律法をねたむほどに尊ばれた。この律法に対する違反は神と人の間を恐ろしいまでに引き離す原因となったのである。純潔なときはアダムに自分の造り主との直接で自由な、また幸福な交わりが与えられていた。しかし、罪を犯した後は、神はキリストと天使を通してのみ人間に伝達されるようになった。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1879 年 1 月 30 日)

1月15日

高くついた一つの過ち

「神は人を正しい者に造られたけれども、人は多くの計略を考え出した。」(伝道の書 7:29)

創世記は社会生活や個人の生涯について非常にはっきりとした報告をしているが盲目や耳が聞こえない、また身体障害や奇形、精神薄弱の子供が生まれたという記録はない。幼児や少年期また成人になったばかりの人々が自然死をしたという記録は一例もなく、病気で死んでいく男女の報告もない。創世記にある死亡記事は次のように記されている。「アダムの子が生まれた年は合わせて 930 歳であった。そして彼は死んだ。」「セツの年は合わせて 912 歳であった。そして彼は死んだ。」……

神は人に非常に卓越した活力を与えられたので墮落した習慣の結果人類にふりかかった数えきれないほどの病気によく耐え、六千年間続いてきた。六千年間続いているという事実は、神が創造の時に人に与えられた力と電気エネルギーがどれほどのものであるかを証拠立てるのに十分である。……もしもアダムが創造の時に、現在の人間が持っている活力の 20 倍の活力を与えられていなかったなら、自然の法則を犯し続けている現代の生活習慣では、人類は死に絶えていたであろう。……

神は人類を現代のような弱々しい状態に創造されたのではなかった。この状態はみこころによる働きではなく、人間のわざであって、間違った習慣や悪習によって、また神が人間の生活状況を支配するために作られた法則を犯すことによってもたらされているのである。(教会への証 3 巻 138,139)

神はご自身の栄光のために人間をお造りになった。テストと試練の後、人類家族は天の家族とひとつになるはずであった。もし彼らが神のすべての言葉に自らが従順であることを示すなら、人類を天国に住まわせるのが神の目的であった。(SDA パイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 1 巻 1082)

神の言葉にそむいて、禁じられた木の実を食べ、夫をも誘って律法を犯させることは、エバにとって、ささいなことのように思われた。ところが、彼らの罪は、不幸が潮流のようにこの世界に流れ込む門を開いたのである。誘惑のときの、誤った一歩がどんな恐ろしい結果をもたらすかをだれが知ることができよう。(人類のあけぼの上巻 50)

口言葉によって

「アダムの子孫は合わせて 930 歳であった。そして彼は死んだ。」(創世記 5:5)

アダムの生涯は悲しみとへりくだり、そして絶えまない悔い改めの生涯であった。彼が子孫や孫に主を畏れるようにと教えると、子孫にこれほどの不幸を味わさせる結果となった罪について度々痛烈に非難された。彼は美しいエデンの園を出た時、自分が死ななければならぬことを思っ恐怖に震えた。彼は死を恐ろしい災難と見なしたのであった。……彼は自分の最初の大きな違反のために自分自身をこの上なく責めた。彼は約束された犠牲を通して神からの許しを懇願した。楽園で犯した自分の罪に対する神の怒りを彼は深く感じた。彼は、最終的に神が地上の住民を洪水で滅ぼす原因となった全体的な墮落を目撃した。はじめに死の宣告を創造主がくだされた時は非常に恐ろしく思えたけれども、何百年も生きた後、みじめな生涯に終りをもたらしてくれることが、神の義にかなった憐れみであるように思えた。

アダムがはじめて落ち葉や散る花にはっきりとした衰えのしるしを目撃した時、現代の人間が自分の死を悲しむ以上に深く悲しんだ。枯れていく花はそれほど深い悲しみの原因とはならない。なぜなら花は傷つきやすく繊細だからである。しかし高く真っ直ぐ立っている木が衰えて葉を散らすと、それは美しい自然の全体的な死を彼に呈示したが、その自然は人にとって特別の益となるために神が造ってくださったものであった。

自分の子供たち、またその子供たちと九代にわたって、アダムは故郷エデンの完全さを言葉で描写し、また自分の墮落とその恐ろしい結果を伝えた。……彼は、罪というもののはどのような形で存在しても罰せられると彼らに断言し、もし彼らが神を愛し畏れるなら、憐れみ深く自分たちを取り扱ってくださる神に従うようにと強く勧めた。

アダムは主を畏れるようにと子孫を教えるよう命じられて、へりくだった従順という模範によって、来たるべき救い主を予表している犠牲に高い敬意を払うよう、彼らを導いた。アダムは神が自分にあらわされたことを注意深く心に留め、子供やその子孫にそれを口言葉によって伝えた。この方法によって神についての知識は保たれた。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1879 年 2 月 6 日)

1月17日

再び家郷へ

「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。ただ、各自はそれぞれの順序に従わなければならない。最初はキリスト、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち、」（コリント第一 15:22,23）

地がよろめき、いなずまがひらめき、雷がとどろく真ただ中で、神のみ子の声が、眠っている聖徒たちを呼び起こす。……死者はその声を聞き、聞く者は生きる。そして、全地に、あらゆる国民、部族、国語、民族からなる大群の足音が鳴り響く。……

どの人もみな、墓に入った時と同じ身長で墓から現われる。よみがえった群衆の中に立っているアダムは、背が高く堂々たる容姿で、神のみ子より少し低いだけである。彼は後世の人々とは、著しい対照を示している。この点からでも、人類の大きな退化がわかる。しかし、どの人もみな、永遠の若さの新鮮さと活力にあふれてよみがえる。……………

すべての傷や醜さは、墓の中に残される。贖われた者は、長い間失われていたエデンのいのちの木に再び近づくことを許され、最初の栄光に輝く人類の完全な背丈に「成長する」のである。

贖われた人々が、神の都に迎え入れられるときに、喜ばしい賛美の叫びが空に響きわたる。今、二人のアダムが会おうとしているのである。神のみ子は、立って手を広げ、人類の祖先を抱こうとしておられる。神のみ子が、この人を創造された。その彼が創造主に罪を犯した。そして、彼の罪のために、救い主の体に十字架の傷が負わされたのである。アダムは、残酷な釘のあとを見て、主の胸にはよりかからず、恥じいって主の足もとにひれ伏し、「ほふられた小羊こそは……さんびを受けるにふさわしい」と叫ぶのである。救い主は、やさしく彼を抱き起こして、彼が長い間追放されていたエデンの故郷をもう一度見るようにとお命じになる。……

アダムが墮落したときに涙を流し、イエスが復活後、み名を信じるすべての者のために墓を開いて、天に昇られたときに喜んだ天使たちが、この再会を目撃する。今彼らは、贖罪の働きの完成を目撃し、賛美の歌に彼らの声を合わせるのである。（各時代の犬争闘下巻 423 ～ 430）

あなた次第

「信仰によって、アベルはカインよりもまさったいけにえを神にささげ、信仰によって義なる者と認められた。神が、彼の供え物をよしとされたからである。彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている。」（ヘブル 11:4）

アダムのむすこたちのカインとアベルは、性格が著しく異なっていた。アベルは、神に忠誠を尽くしていた。彼は、墮落した人類を扱われる神の処置に義と恵みを認め、感謝して贖罪の希望を受け入れた。しかし、カインは反逆の精神をいだき、アダムの罪のために、神が地と人類をのろわれたことに対してつぶやいた。彼は、サタンが墮落したのと同じ方向に自分の心がむかうままにして自己称揚にふけり、神の義と権威とを疑った。……

ふたりの兄弟は、同じように祭壇を築き、それぞれの供え物を持ってきた。アベルは、主の命令に従って群れの中から犠牲をささげた。「主はアベルとその供え物とを顧みられた」（創世記 4:4）。天から火が下って、犠牲を焼き尽くした。しかし、カインは、主の直接で明白な命令を無視して、地の産物だけをささげた。それを受け入れたことを示すしは、天からなかった。……

アベルは、贖罪の大原則を理解した。彼は自分が罪人で、彼の魂と神との間の交わりを、罪とその刑罰である死とが妨げているのを知った。彼は、ほふられた犠牲、すなわち、犠牲にされた生命をたずさえてきて、彼が犯した律法の要求を認めた。彼は、流された血によって、来たるべき犠牲、カルバリーの十字架上のキリストの死を見た。そして、彼は、そこでなされる贖罪を信じて、自分が義とされ、供え物が受け入れられた証拠が与えられた。

カインはアベルと同様に、こうした真理を学んで受け入れる機会があった。彼は、独断的決定の犠牲者ではなかった。兄弟のうちのひとりが受け入れられて、他のひとりが退けられるように神は定められたのではなかった。アベルは、信仰と従順を選び、カインは、不信と反逆を選んだ。万事はこの点にかかっていた。（人類のあけぼの上巻 65 ～ 68）

1月19日

進むのに二つの道

「主はアベルとその供え物とを顧みられた。しかしカインとその供え物とは顧みられなかったので、カインは大いに憤って、顔を伏せた。」(創世記 4:4,5)

カインは約束の犠牲について、また犠牲の供え物の必要について、心中に不平と不信をいだきながら神の前に来た。彼の供え物は、罪の悔い改めの表明ではなかった。彼は、今日の多くの人々と同様に、神に指示された通りの計画に従い、約束の救い主の贖罪に全く自分の救いをゆだねることは弱さを承認することであると思った。彼は、自己信頼の道を選んだ。彼は自分の功績に頼った。彼は小羊を持ってきて、その血を供え物にまぜることをしないで、彼の実、彼の労働の産物をささげた。彼は自分から神にささげるものとして供え物をささげ、それによって、神に喜ばれたいと思った。カインは、神に従って祭壇を築き、犠牲をたずさえてはきたが、彼は部分的に従っただけであった。彼は最も重大な部分、すなわち、救い主の必要を認めることを省略していた。……

カインとアベルは、終末に至るまで世界に存在する二種類の人々を代表している。一方は罪のために定められた犠牲を受け入れるが、他方は、あえて自分の功績にたよろうとする。彼らの犠牲は、神の仲保のいさおしによらないものであって、神の恵みにあずかることはできない。われわれの罪は、ただイエスの功績だけによって許される。……

人類は贖罪ではなく、文明の発達、すなわち、洗練と向上と更生とが必要であるという人もある。カインが、犠牲の血をぬぎにした供え物によって、神の恵みを得ようとしたように、これらの人々も贖罪を度外視して、神の標準にまで人類を高めようとするのである。カインの生涯は、どのような結末に至るかを示している。また、キリストを離れた人がどうなるかを示している。人類は、自分を再生させる力を持ち合わせない。それは、神に向かって向上するのではなく、サタンの方へ墮落する傾向がある。キリストだけがわれわれの希望である。「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」。(人類のあけぼの上巻 66 ～ 69)

あなたの顔が物語っている

「そこで主はカインに言われた、『なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのですか。正しい事をしているのでしたら、顔を上げたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せています。それはあなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません。』」（創世記 4:6,7）

主はカインの激怒を見られた。彼の顔の表情が曇るのを見られた。こうして主がどれほど注意深くすべての行動、すべての意図と目的、怒っている顔の表情さえ気づかれるかが示されている。これは、人間が何も言わなくても、神の方法と御心を行なうことへの拒絶を表わしている。（SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 11 卷 1086）

主のみ言葉に注意しなさい。……この言葉はカインのように神のご要求にまったく反対するサタンの扇動を行動にあらわすときに自分の激しい感情を表わしがちな若い男女すべてに語りかけている。（原稿 77、1897 年）

あなたが真理の聖なる規制する影響力を振り捨てる方を選ぶなら、サタンはあなたを彼の意志どおりに動くとりこにするであろう。あなたは食欲と情欲にはけ口を与え、肉欲に対し、また悪い嫌悪感をもよおす欲望に対する手綱をゆるめる危険性がある。試練と苦難のもとで落ちついた静穏を表情に浮かべ、忠実なエノクのように、理解を越えることにも希望と平安に輝く顔をしている代りに、あなたは自分の表情に、肉の思い、貪欲な欲望を刻み込む。あなたは神ではなくサタンのしるしを身におびる。（教会への勧告 2 卷 92）

子供や青年の多くは、顔にその性格が印されている。彼らの生涯の経歴を容貌に帯びている。・・・もしキリストが心に宿って心の原則となっていれば、その表情に、純潔、高雅、平和、愛を読みとることができる。そうでない他の顔には、悪い性格があらわれて、利己心、こうかつ、あざむき、いつわり、敵意、嫉妬があらわれる。このような性格の心や顔を持った人に、真理を印象づけるのは、なんとむずかしいことであろう。…

キリストは、すべての霊的教養をお備えになっている。もしイエスが心の中に住みたもうなら、心は聖霊のきよい徳でみたまされ、それが顔にあらわれて表情を変える。もし、美しく、愛すべき品性を持ちたいと願うなら、神のおきてが心に書かれ、生活に実行されなければならない。（安息日学校への勧告 127,128）

1月21日

カインは「去った」

そして「カインは主の前を去っ」た。(創世記 4:16)

神はカインに罪を告白する機会をお与えになった。……彼は、自分の行為とそれを隠すために言っただけが罪深いものであることを知った。しかし彼は、なおも反逆心を捨てなかった。それで宣告はこれ以上延ばすことはできなかった。……

カインの犯罪は、死の宣告に値したが、あわれみ深い創造主は彼の生命を助け、悔改める機会をお与えになった。しかし、カインは心をかたくなにし、神の権威に対する反逆を扇動することに専念した生活を送り、大胆不敵で放縦な罪人たちの先祖になった。サタンに誘惑された背信者カインは、他の人びとを誘惑するものとなった。彼の生活とその感化は人びとを墮落させ、ついに地上は破滅にひんするまでに腐敗して悪に満ちた。……

カインは神ののろいを受けて父の家から離れた。……彼は、エデンの回復の約束をなげうち、罪ののろいのもとにある地上で、財産や快楽を求めるために主の前を去って行った。こうして、彼は、この世の神を礼拝する多くの人々の先頭に立ったのである。彼の子孫は、世俗的、物質的発展の面だけでは、すぐれた力量をあらわした。しかし、彼らは神のことには無関心で、人類に対する神の計画にはそむいていた。(人類のあけぼの上巻 72～76)

神は、殺人者カインの生命を助けることによって、罪人を生かしかって気ままな罪の生活を続けさせる結果がどうなるかという実例を、世界に示された。カインの教えと模範の影響によって、彼の子孫の大群衆は罪に誘われ、ついに「人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかり」になった。(各時代の争闘下巻 293)

カインが住むところを求めて、神の前を去っていったように、また放蕩むすこが、「遠い所」へさまよっていったように、罪人は、神を忘れてほかに幸福を求めるのである。(キリストの実物教訓 181)

神と共に歩む

「エノクは65歳になって、メトセラを生んだ。エノクはメトセラを生んだ後、三百年、神とともに歩み、男子と女子を生んだ。」(創世記 5:21,22)

エノクは、彼が65歳になってむすこを生んだとするされている。……エノクは、そうした初期の時代に、神を愛し、おそれ、神の戒めを守った。……。しかし、エノクは、彼の長男の誕生後、さらに高い経験に達し、神とさらに密接な関係にはいつていった。彼は神の子として、自分に与えられた義務と責任を、もっと深く自覚した。子供が父を愛し、父の保護に単純に信頼するのを見たとき、そして、長男に対して深い愛情を自分の心に感じたときに、彼は、そのみ子を人間に賜った驚くべき神の愛と、神の子らが天の父に対して持たなければならない信頼に関して、尊い教訓を学んだのである。キリストによって示された測り知れない無限の神の愛は、彼の昼夜の瞑想の課題になった。彼は、自分の力の限りを尽くして、いっしょに住んでいる人々にその愛を示そうとした。

エノクが神と共に歩んだのは、恍惚状態や幻を見るようなものではなくて、日常のすべての務めを果たすことにおいてであった。彼は、自分を世から全く遮断して、隠者にならなかった。というのは、彼は、この世で神のためにしなければならない仕事があったからである。彼は、家庭においても、人々との交際においても、夫、父、友人、市民として、常に堅く立つてゆるがない主のしもべであった。

...

この清い歩みは三百年続いた。もしクリスチャンが生命のはかなさを知り、または、キリストの再臨がまさに起ころうとしていることを知ったならば、ますます熱心になって献身しようとしなないものはあるまい。しかし、エノクの信仰は、幾世紀の年月を経るにつれて強くなり、その愛はいつそう熱烈になっていった。(人類のあけぼの上巻 80,81)

彼(エノク)は神と思いが一つであった。…もしわたしたちが神と一つ思いであればわたしたちの意志は神の意志に飲み込まれ、神が導かれる道がどこであろうとそれに従うであろう。あどけない子供が父親の手に自分の手をあずけて、暗かろうと明かろうと完全に信頼して共に歩むように、神の息子娘は喜びも悲しみもイエスと共にしながら歩むべきである。(ビュー・アンド・ヘルド 1889年12月3日)

1月23日

神が彼を取られた

「エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなった。」(創世記 5:24)

エノクは300年神と共に歩んだと記されている。それは神と深い交わりをするのに十分な年月であった。……エノクは神との親交に同意し……神との交流を愛したので神と深い交わりをした。(原稿 16、1887年)

エノクは際だった品性の持ち主であった。多くの人が彼の生涯を、有限な人間の大多数が到達できる以上のなにかとして見ている。しかしエノクの生涯と品性は、キリストが来られる時、彼らがエノクのように天に移される対象であるのなら、そのすべての者の生涯と品性がならねばならないものをあらわしているのである。彼の生涯は、個人個人の生涯が神と密接につながっているなら可能な生涯であった。地上の住民の墮落のゆえに、神が彼らを滅ぼすため、世界に洪水をもたらされたほど邪悪な感化に、エノクが囲まれていたことを、わたしたちは覚えていなければならない。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1879年10月30日)

わたしたちは邪悪な時代に生きている。終りの時代の危難がわたしたちの周りにたれこめてきている。不法が満ち多くの者の愛が冷えてきているからである。……

エノクの実例がわたしたちの前にある。……彼は、道徳上の汚染が自分の周り一面にあふれている墮落した時代に生きていたが、自分の思いを献身へ、また純潔を愛するよう訓練した。彼の会話は天に関することであった。彼は自分の思いがこの水路を流れるよう教育し、神のしるしを身におびていた。彼の表情はイエスの顔に輝く光で明るくされていた。

エノクはわたしたちと同じように誘惑にあい、わたしたちを取り囲んでいる社会同様、義に好意的ではない社会に囲まれていた。彼が呼吸をしていた環境は、現代と同じように罪と墮落で汚染されていたが、彼は聖潔な生涯を送った。彼は自分が生きていた時代に広く行き渡っていた罪に汚されなかったので、わたしたちも純潔にまた墮落しないままでいられるのである。彼は、終りの時代の危難と墮落のただ中に生きる聖徒たちの代表であった。なぜなら神に対する忠実な服従のゆえに彼は天へ移されたからである。そのように生きて残っている忠実な者も天に移される。彼らは罪深い墮落した世界から、天の純潔な喜びへ移されるのである。(教会への証 2巻 121,122)

わたしたちの現在の働きは世から出て、世と分離することである。これが、エノクがしたようにわたしたちが神と共に歩むことのできる唯一の方法である。(教会への証 5巻 535)

キリストを見つめて

「わたしたちはみな、顔おいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。」(コリント第二 3:18)

エノクはその活動的な働きの生涯のまっただなかで神との親密な結びつきを堅く保ち続けた。働きがより大きく、より重くなるほど、彼の祈りはますます絶えまなく熱心になっていった。彼は一定期間すべての社会の交わりから身を引くという習慣を続けた。しばらくの間人々の中にとどまって、教えと模範によって彼らのためになる働きをした後、神だけが分け与えることのできる天来の知識を飢え渇くようにもとめて、人里離れた場所で一定期間を過ごすために引きこもった。神とのこのような親密な結びつきによって、エノクは神のかたちをますます反映するようになり、彼の顔は、イエスのみ顔に輝く光のような聖なる光に照らされた。彼がこの神との深い親交から出てくると、不信心な者ですら、エノクの表情に浮かぶ天のしるしを畏敬の念をもって見つめた。(福音宣伝者 53)

エノクは主をいつも彼の前に置いていた。……彼はキリストを自分の変わらぬ同伴者とした。彼は世にあって、世に対する自分の義務を果たしたが、彼はいつもイエスの影響力の下にいた。彼はキリストの品性を反映して、善、憐れみ、優しい同情、共感、寛容、柔和、謙遜、そして愛というキリストと同じ特質を表した。彼のキリストとの交際は、彼が非常に親密に結びついていたそのお方の持つみかたちへと、日毎に彼を変化させた。日毎に彼は、その思考と感情において、自分の道からキリストの道、天の道へと成長していった。(SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 1 巻 1097、1098)

いつも、主を目の前にあおいで、主に感謝と賛美をささげているならば、わたしたちの信仰生活は常に新鮮さを保つことができる。わたしたちの祈りは、ちょうど友人と語るように、神との会話のかたちになり、神は、わたしたちに個人的に、神の神秘について語りかけてくださるのである。わたしたちは、しばしば、尊いイエスの臨在を身近に感じることもある。昔、神がエノクと語られたときのように、神がわたしたちに近づかれると、わたしたちの心中も燃えるのをおぼえる。こうしたことがほんとうに、クリスチャンの経験となるとときに、そのクリスチャン生活には、純真、けんそん、柔和、心のひくさなどがいちじるしくなり、接するすべての人に、彼がイエスと共にあって、イエスから学んだ者であることを感じさせるのである。(キリストの実物教訓 109)

1月25日

開かれている扉

「信仰によって、エノクは死を見ないように天に移された。神がお移しになったので、彼は見えなくなった。彼が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである。」(ヘブル 11:5)

わたしたちが感情によってではなく信仰によって歩むことを学ぶ時、わたしたちが助けを必要とするちょうどその時に神から助けを受け、神の平安がわたしたちの心の中に入ってくる。エノクが生きたのは服従と信頼というこの単純な生涯であった。もしわたしたちがこの単純な信頼という教訓を学ぶなら、わたしたちの生涯はエノクが受け、彼が神を喜ばせた生涯を証するものとなるであろう。(今日のわたしの生涯 14)

品性建設のあらゆる面において、神を喜ばせなければならない。これはわたしたちにもできることである。エノクは、墮落した時代に生存しながら、神を喜ばせた。現代にも、エノクのような人びとがいる。(キリストの実物教訓 306)

300 年の間エノクは心の純潔を求め続け、それによって天と調和することができた。彼は三世の間神と共に歩んだ。彼は日毎により密接なつながりを切望し続け、神が彼をご自分のもとに取られるまで、その親密な交わりはますます密になっていった。彼は永遠の世界の門口に立っており、彼と祝福された地との間はただ一歩であった。そして今門が開き、地上で久しく神と共に歩み続けていたのでそのまま歩みを続け、エノクは聖なる都の門をくぐって、そこに入る人々の初めの人になったのである。(福音宣伝者 53)

神のみ言葉である聖書さえ手にあれば、人はどんな境遇に陥っても、自分の好きな友をえらび得るのである。聖書のページを開いて、人類の最も高貴な最もすぐれた人々と語り、人類に話しかけられる永遠なる神のみ声に聞き入ることができる。……。この世の悩みと誘惑の中にある人々に希望の思いと聖潔をあこがれる思いをあたえることができる。……。神と共に歩んだ古代の人と同じに、いよいよ永遠の世界の門口に近づき、そしてついには開かれた門を通してそこにはいることができる。そこでは自分が見ず知らずの人間ではないことに気がつくであろう。自分にあいさつの言葉をかけてくれる声は、地上にあるとき、目には見えなかったけれども、友として交わった聖者たちの声であり、この世において聞きわけそして愛することをおぼえた声である。神のみ言葉を通して、天との交わりの中に暮らしていた者は、天における交際にも心やすさを感じるのである。(教育 136、137)

神か、偶像か

「彼らの偶像はしろがねと、こがねで、人の手のわざである。…これを造る者と、これに信頼する者とはみな、これと等しい者になる。」(詩篇 115:4, 8)

ノアの時代、地はアダムの罪とカインの殺人の結果二重ののろいを受けていた。しかし、これは、自然の表面に大きな変化を与えなかった。…

人類は、まだ初期の活力を多く保っていた。アダムが、生命を長らえさせる木に近づくことができたときからわずか数代しか経ていなかったもので、人間の一生はなお、世紀を単位として数えられていた。非凡の能力をもって計画し、実行することができた長命のこうした人々が、もし、神の奉仕のために自分をささげていたならば、彼らは地上で創造主のみ名に誉れを帰していたことであろう。…しかし、彼らは、そうしなかった。…

彼らは、神のことを考えようとしなかったもので、いつのまにか神の存在を否定するようになった。彼らは、自然の神のかわりに、自然を拝んだ。…広大なときわ木の林は、偽りの神を礼拝するためにささげられた。…人々は神を全く忘れ、自分たちがかつてにつくり上げたものを拝んでいた。その結果、彼らはますます墮落した。…

厳密な意味において、当時の人々は、全部偶像礼拝者であつたのではない。神を礼拝すると公言する者が多くいた。彼らの偶像は、神を代表するものであつて、人間はそれによって、神に関する明確な観念をいだくことができると彼らは主張した。この種の人々が、率先してノアの説教を拒否した。神を物質的対象によって表わそうとすることによって、彼らの思いは暗くなり、神の威光と力とを見ることができなくなった。彼らは、神の品性の神聖さ、また、神の要求の神聖さも不変性も悟らなくなった。(人類のあけぼの上巻 87～93)

人間は、真理、純潔、聖潔に関して、自分が持っている観念以上に到達するものではない。もし、精神が、人間的水準以上に高められず、無限の知恵と愛を瞑想するために信仰によって高尚にされないならば、人間は常に低い方へ低い方へと沈んでいくのである。偽りの神の礼拝者は、その神々に人間の性質と情欲とを付与した。こうして、彼らの品性の標準は罪深い人間の形に下落した。(人類のあけぼの上巻 89)

1月27日

地にいるネリピム

「そのころ地にネリピムがいた。」(創世記 6:4)

地上にいた初めの人々は、世界を創造された無限の方、神から教えを受けた。無限の知恵から直接知識を受けた人々は知識が不足していたわけではなかった。

.....

現在、古代人が持たなかった多くの発明と改良、そして省力の機械がある。彼らはそれらのものを必要としていなかった。

洪水前の人々は何百年も生きた。そして百歳になってもまだ青年と見なされた。これら長命の人々は健全な身体の中に健全な知性を宿していた。彼らは六十の年齢から百歳にかけて活動の場に出た。それは現在もつとも長生きする人々がそのはかなく短い人生に自分の役割を演じて、舞台を去る年月に匹敵している。(霊の賜物 4 卷一部)

偉大な体格と体力を持ち、その知恵深いことで有名な巨人がたくさんいた。彼らは、実に巧妙に驚くべきものを作り出すことにたけていた。しかし、彼らは、その技量と能力に応じて、ほしいままに悪を行なう罪も大きかった。

神は、これらの洪水前の人々に、多くの豊かな賜物をお与えになった。ところが彼らは、自分自身をあがめるためにそれを用い、それをお与えになったかたよりも、賜物そのものに愛着を持って、それらをのろいにかえた。彼らは、金、銀、宝石、最上の木材などを用いて自分たちの家を建築し、技術の限りを尽くして住居を飾りたて互いにしのぎを削った。彼らは、自分たちの高慢な心の欲望を満たすことだけを求め、快楽と罪惡に夢中になっていた。(人類のあけぼの上巻 88)

彼らは、彼らの計画と会議から神を除外したために、その思い図ることが腐敗した。彼らは神が一度も命じられなかったことをずる賢く行い、巧みに悪を行った。……彼らは、慈悲深く与えられた猶予期間を、ノアを嘲笑することに用いた。彼らはノアを風刺的に描いて批判した。彼らは、神が必ず実行すると言われた裁きについて、ノアが非常に熱心であることを嘲笑した。彼らは科学や自然を支配している法則を持ち出した。それからノアの言葉に騒ぎ立て、彼を気違い呼ばわりした。(SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホフ・コメント] I 卷 1090)

タラントの悪用

「その弟の名はユバルといった。彼は琴や笛を執るすべての者の先祖となった。チラもまたトバルカインを産んだ。彼は青銅や鉄のすべての刃物を鍛える者となった。トバルカインの妹をナアマといった。」(創世記 4:21、22)

洪水で、今日の世界が知っている以上の芸術と技能の発明が滅亡した。破滅された芸術は、今日の芸術が誇っているものよりもさらに優れていた。……

神は世界を見下ろして、人間に与えていた知性が曲げられ、その心に思い図ることが常に悪い事であるのを見られた。神がこれらの人たちに知識を与えられた。神が彼らに貴重な観念を与えたのは、彼らが神の計画を実行するためであった。けれども主は、彼に造られた人たちが知恵と機転、判断力を所有すべきなのに、あらゆる知性の特質を自己賞揚のために用いているのをご覧になった。洪水によって、神は地球からこの長命の人種を拭い去り、彼らと一緒に、彼らが悪のためだけに用いてきた知識も滅んだ。地球に再び人間が増えたとき、主は、彼らが主の大いなる計画を遂行するために必要なものだけの能力を与え、人に神の知恵を委託することをもっと控えられた。(SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 1 卷 1089)

今日の世界は時代の進歩について語ることで非常に満足している。しかし神はこのことを喜んではおられない。現代の人々がたくさんの発明することによって、彼らは洪水前の人々と同じであると言える。ノアの洪水以前には多くの素晴らしい芸術と科学があった。神のみ手によって造られたアダムのこれらの子孫は、わたしたちが現在見るができないほどの才能と能力を持っていた。(原稿 16、1898 年)

洪水前に生きていた人々は、世界とその住民の創造主である神から、二、三步離れているだけであった。この人々に与えられた長命と豊かな知力神の奉仕に用いられるはずであったが、彼らの知的能力、その力強い能力は神の名誉を汚すよう悪用された。……

人が神から離れる時、彼らは自分をサタンの支配下に置く。タラントは神の奉仕に用いるために人に与えられている。……どの人にとっても唯一安全な道があるが、それは「主はこう言われる」というみ言葉に服従する道である。(原稿、319、1898 年)

1月29日

裕福な社会

「洪水の出る前、…人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう。」(マタイ 24:38,39)

ノアの時代の世界の罪は不節制であった。そして今日飲食における不節制にみられる罪が非常にきわだっているので、神はいつまでもそれを許すことはなさない。…人間は、それ自体は法にかなっていることを過度に行うので、主が制定された自然の法則を破る結果、全人格が苦しむのである。

飲食における不節制が増えている。食卓には快樂主義者の食欲を満足させるあらゆる種類の食物が並べられる。このような行動をとれば、次に来るのは苦しみである。体の組織の活力は負わされた重荷のもとに耐えることができず、ついには衰えてしまう。

神は…健康と生命の法則を故意に犯した結果を和らげるために奇跡を行ったりはされない。…人は自分のために支払われた値で自分自身を評価しなければならない。人がこの価値を自分自身に置くとき、知っていながら、自分の身体上のまた精神面の能力を悪用する事はない。自分自身をサタンの代理人の支配下に置き、また健康や敬神の念、靈性に破滅を招くことにふけり、夢中になってしまうことにより、自分の貴重な能力を悪用することは、天におられる神に対する侮辱である。(手紙 73a1896 年)

世界の悪がこれほど大きくても、主は 120 年間という猶予の期間を人に与えられた。もしその間に人が望めば悔い改めることができるのであった。けれども寛大で憐れみ深い神の寛容にもかかわらず、人々は自分たちの機会を活用しなかった。しばらくの間彼らは畏敬の念に打たれ、自分たちがしていたのと同じ向こうみずな行動を続けるのを恐れたが、やがて邪悪な習慣が自制に打ち勝った。人々が説得に抵抗するのに比例して、彼らの識別力は曇ってきて、不信心な進路に従おうとする願いが強くなった。(原稿 88,1897 年)

わたしたちが主に仕えるための体力を維持するために飲食をすることは必要である。しかし、天におられるみ父を喜ばせるという思いではなく、自分の嗜好を喜ばせるためだけに食事をし、大食をするなら、わたしたちはノアの時代の人々がしていたのと同じことをしているのである。(原稿 16,1895 年)

めとり、とつぎ

「洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は……めとり、とつぎなどしていた。」(マタイ 24:38)

ノアの時代は暴力が世界に広く勢力をもっていた。人々は脅迫という手段で他人を脅した。隣人を公正に扱うかわりに自分自身の法にかなわない願望を実行した。彼らは神の賢明な取り決めに反して多数の妻を持った。初めに神はアダムに1人の妻を与えることによって、地上に住むすべての者に、この点に関するご自分の秩序と律法を示された。アダムとエバの違反と墮落は人類に罪と惨めさをもたらし、人間は自分自身の肉欲に従って神の秩序を変えた。人々が妻の数を増していくに従い、邪悪と不幸が増えていった。人が複数の妻や、家畜、あるいは隣人の持物を何でも取ろうと決めたなら、公正であるか正しいかは考えず、行動し、自分の暴力行為を誇った。彼らは動物の生命を取ることを喜び、これを食物としたが、このようにして彼らの残忍さと暴力は強まり、人間の血を彼らが驚くほどの無関心さで見ることになったのである。(霊の賜物 3 巻 63,64)

セツの子孫は神の子らと呼ばれ、カインの子孫は人の子らと呼ばれた。神の子らと人の子らがいりまじるようになったので、神の子らは墮落し、人の子らと結婚して、その妻たちの影響を受け、特殊なきよい品性を失い、カインの子たちと一緒にあって偶像を礼拝するようになった。多くの者は、神をおそれる思いを捨て、神の戒めをふみつけた。しかし中には義を行い、創造主をおそれあがめる人々が、少数ながらあった。ノアとその家族は、その少数の義人の中にはいつていた。(生き残る人々 77)

一夫多妻は、ごく初期から行なわれていた。それは洪水前の世界に神の怒りを招いた罪のひとつであった。……サタンは、とりわけ結婚制度をゆがめ、その義務を弱め、その神聖さを減ずることに力を入れた。というのは、人間のうちにある神のかたちをそこない、悲惨と悪徳に戸を開くの、これほど確実な方法はなかったからである。(人類のあけぼの上巻 398)

1月31日

その日まで

「また、古い世界をそのままにしておかないで、その不信仰な世界に洪水をきたらせ、ただ、義の宣伝者ノアたち 8 人の者だけを保護された。」(第二ペテロ 2:5)

神は古い世界の住民に、地をその不純から清めるつもりであると警告された。しかし彼らはそれを迷信的な預言であるとなしてあざけり笑った。(原稿 161,1897 年)

最初、多くの者は、警告を受け入れたように思われた。しかし、彼らは、真に悔い改めて神に立ち帰ったのではなかった。彼らは、罪を捨てようとはしなかったのである。洪水が来るまで、しばらくの間、彼らの信仰は試みられたが、彼らはその試練に耐えられなかった。彼らは、一般の不信仰に負け、ついに、以前の仲間といっしょになって、厳粛な使命を退けた。ある者は、深く感動して、警告の言葉に聞き従おうとした。しかし、あざけり笑う者が多いために、ついに彼らと同調して……やがてだれよりも大胆不敵にちょう笑する者になった。というのは、一度光を与えられながら、罪を示す神の霊に逆らった者ほど、無謀で、罪の深みに沈む者はないからである。(人類のあけぼの上巻 92)

彼らは、歓楽ときょう宴をつづけた。彼らは、食べ、飲み、植え、建てなどして、将来得ようと望んでいる有利な立場について思いを練っていた。そして、彼らは、ますます罪惡の深みに沈み、神の要求を大胆に無視して、無限の神をおそれていないことを示した。……

もし、洪水前の人々が、警告を受け入れ、その悪行を悔い改めたならば、主は後にニネベになさったと同様に彼の怒りをとどめられたことであろう。しかし、その時代の人々は、良心のとがめと神の預言者の警告にがん強に逆らって、彼らの罪のますめを満たし、滅亡の期は熟した。(人類のあけぼの上巻 94,95)

主はご自分の使者を通じて、万物の終りが近いことを宣言する警告のメッセージをわたしたちに送ってこられた。ある者はこの警告に聞き従うが大多数の者はこれに注意を払わない。

キリストが来られるときもこのようであろう。農夫、商人、弁護士、貿易商などはみな自分の仕事に夢中になっているであろう。そして主の日は彼らにとってわなのように来るであろう。(原稿 161、1897 年)

研究 6

神の栄光ともう一つの声



もう一つの声

エリヤ、バプテスマのヨハネ、改革者（だれ、時、働きの型）

終わりの時の働きに、まず、次の言葉が与えられています。

「あなたがたは、わがしもべモーセの律法…を覚えよ」（マラキ 4:4）。

神に帰るということは、神の戒めに帰るということです。イスラエルの歴史を見ると、この招きが何度も繰り返されてきました。そしてそれを伝えるのが預言者です。

「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」（マラキ 4:5,6）。

エリヤは、アハブの治めた暗黒の時代に、神に帰るように関係回復のメッセージを伝えました。

神はあらかじめ申命記 11:13-17 に「もし、きょう、あなたがたに命じるわたしの命令によく聞き従って、あなたがたの神、主を愛し、心をつくし、精神をつくして仕えるならば、主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨ともに、時にしたがって降らせ、…られるであろう。…あなたがたは心が迷い、離れ去って、他の神々に仕え、それを拝むことのないよう、慎まなければならない。おそらく主はあなたがたにむかい怒りを発して、天を閉ざされるであろう。そのため雨は降らず…」と警告しておられました。しかし、その実行を望まれない神は、ご自分に戻るようご自分の民に預言者を遣わしてこられました。

「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう」（列王記上 17:1）。

すでに予告されている警告も、預言者の言葉なしに実行なさることはありま

せん。これは現代も同じです。約束通り、エリヤの霊と力とをもって預言者が遣わされます。それによって、主の恐るべき日の前に、神との関係が回復されるためです。

イエスの初臨の時に、この働きのために遣わされたのが、バプテスマのヨハネでした。

「彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう」（ルカ 1:17）。

エリヤの霊と力は神を恐れる霊であり、神のみ言葉による力です。彼はこの力によって主に整えられた民を備えるのでした。

「昔、王が自分の領土のめったに訪れたことのない地方を旅行するときには、一団の人々が、王の戦車より先に行って、けわしい道を平らにし、穴を埋めて、王が安全に支障なく旅行できるようにした。福音の働きを例示するために預言者イザヤはこの習慣を引用して、『もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ』と言っている（イザヤ書 40:4。）」（各時代の希望上巻 151）。

ヨハネは預言者として、主を直接指し示し、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1:29）と民に訴えました。「すべての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までである」（マタイ 11:13）。

主の再臨の前も同様です。

「〔バプテスマのヨハネ〕は、キリストの初臨に道を備えたことにおいて、主の再臨に民を備えさせる人々を代表していた」（各時代の希望上巻 100）。

「あなたの子らは久しく荒れすたれたる所を興し…」（イザヤ 58:12）。あなたの子らとはだれでしょうか？

「女のすえの残りの子ら…」（黙示録 12:17 欽定訳）。

主の日の前に回復の働きをする「女のすえ」（創世記 3:15）の残りの子ら、すなわちキリストに残る子らです。彼らは、父に心を向けている者であり、また父に子の心を向けさせる人々です。

歴史は繰り返されている

初臨の時に、ユダヤ人たちは約束されていた預言者エリヤを待っていました。

「弟子たちはイエスにお尋ねして言った、『いったい、律法学者たちは、なぜ、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか。』」

ところが、それほど熱心に待っていた彼らは、その預言者エリヤかを認めたでしょうか？

「答えて言われた、『確かに、エリヤがきて、万事を元どおりに改めるであろう。しかし、あなたがたに言うておく。エリヤはすでにきたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かつてに彼をあしらった。人の子もまた、そのように彼らから苦しみを受けることになる』。そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと悟った」(マタイ 17:10-13)。

確かに、神の預言通り、エリヤは先に来て、その働きをします。

「エリヤの時代から幾世紀の長きにわたって、彼の生涯の記録は、背信のさなかにあつて正義のために立つように召された人々に、靈感と勇気を与えてきた。そして『世の終りに臨んでいる』われわれに、それは特別の意義を持っているのである(コリント第一 10:11)。歴史は繰り返されている」(国と指導者上巻 146)。

主の再臨に備えるために、預言者エリヤの霊と力をもって、モーセの書にある神の律法へ戻るように告げ、万事は元通りにされる働きがなされなければなりません。

「よく言うておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう」(マタイ 5:18,19)。

働きの型

「このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかねばならなかった」(使徒行伝 3:21)。

「終末時代に、神のすべての制度が回復される」(国と指導者下巻 277)。

「イエスは『はなはだよかった』と神が仰せになった祝福されたエデンの園の時代に、彼らを注目させられた。神の栄光と人間の幸福のための二つの制度、すなわち結婚と安息日の起源がここにあった」(祝福の山 79)。

エデンの時の始めに戻る、それが万物更新です。その時に定めて下さった一つ一つの制度が当時のままに回復されなくてはなりません。再臨信徒たちが進むその過程をホワイト夫人は幻の中に見せられました。

「わたしは暗い世界から高く高く上にのぼっていくように感じた。わたしは振り向いて、地上にいる再臨信徒たちを探したが、見つからなかった。すると、『もう一度見なさい。もう少し上を見なさい』という声が聞こえた。それでわたしが目を上げてみると、地上のはるか上のほうに、まっすぐな狭い道がかかっていた。この道の上を、再臨信徒たちは、都に向かって旅していた。道の始めに、明るい光があって、彼らを後ろから照らしていた。…もし彼らが彼らのすぐ前にいて彼らを都に導いておられるイエスに目をとめていれば、彼らは安全であった。…他の者たちは、無分別にも彼らの後ろの光を拒んで、自分たちをここまで導いてきたのは神ではないといった。彼らの後ろの光は消えて、彼らの足元は真っ暗になった。」(初代文集 62,63)

「主はこう言われる、『あなたがたはわかれ道に立つて、よく見、いにしへの道につき』(エレミヤ 6:16)

「いにしへの道につき」、エデンに起源をもつ聖なる制度にまで戻らなければなりません。それがイエスの再臨の前に、エリヤの霊と力をもって成し遂げられるべき働きです。

「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた」(黙示録 18:1)。

「テストの時がわたしたちに迫っている。なぜなら、第三天使の大いなる叫びが、罪を許す贖い主キリストの義の啓示のうちにすでに始まったからである。これは全地をその栄光で満たす天使の光の始まりである」(ℳℳℳℳ・メッセージ 1 巻 363)。

イエスの初臨の時、エリヤが先に来ると言う人々に、イエスは「確かに、エリヤがきて、万事を元どおりに改めるであろう。しかし、あなたがたに言うておく。エリヤはすでにきたのだ」と言われました。

主の再臨の前はどうでしょうか？

「主はご自分の大いなる憐れみのうちにワゴナーとジョーンズ長老を通してご自分の民に最も貴重なメッセージを送って下さった。このメッセージは世の前に、上げられた救い主、すなわち全世界の罪のための犠牲をもつと顕著に提示するためであった。それは保証人を信じる信仰を通しての義認を提示した。それはキリストの義を受け入れるようにと民を招いた。その義は神のすべての戒めに対する従順のうちに表されている。…これは神が世に伝えるようにと命じられたメッセージである。それは第三天使のメッセージ、すなわち大いなる声で宣布され、大規模なこのお方の御霊の注ぎの伴うべきメッセージである」(牧師への証 91, 92)。

エリヤを認めなかった人々が、キリストを認めることはありませんでした。わたしたちは、約束されたエリヤを認めているのでしょうか？

「三天使のメッセージも、このようにして宣布される。それが非常な力で伝えられる時が来るならば、主は謙遜な器を通して働かれ、主の奉仕に献身した人々の心を導かれる。働き人は、学歴ではなくて、聖霊を注がれることによって資格を与えられる。信仰と祈りの人は、聖なる熱意に燃えて出て行き、神から与えられる言葉を宣言せざるをえなくなる。バビロンの罪は暴露される。教会の法令を政権によって強制することの恐るべき結果、心霊術の侵入、法王権のひそかではあるが急速な発展などが、みな暴露される。これらの厳粛な警告によって、人々は動かされる。こうした言葉を聞いたことのない者が、幾千となく耳を傾ける」(各時代の大争闘下巻 376)。

声（創世記から黙示録まで；アダムの時から）

この働きが声によってなされることに注目しましょう。

「わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた」(黙示録 18:4)。

キリストの再臨を信じる人々は、バプテスマのヨハネのように自分の任務を理解し、そのために準備している必要があります。

「さて、ユダヤ人たちが、エルサレムから祭司たちやレビ人たちをヨハネのもとにつかわして、『あなたはどなたですか』と問わせたが、その時ヨハネが立てたあかしは、こうであった。すなわち、彼は告白して否まず、『わたしはキリストではない』と告白した。そこで、彼らは問うた、『それでは、どなたなのですか、あなたはエリヤですか』。彼は『いや、そうではない』と言った。…『あなたはどなたですか。わたしたちをつかわした人々に、答えを持って行けるようにしていただきたい。あなた自身をだれだと思えるのですか』。彼は言った、『わたしは、預言者イザヤが言ったように、「主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばれる者の声」である』。」(ヨハネ 1:19-23)。

ヨハネが引用した聖句はイザヤのあの美しい預言でした(各時代の希望上巻 150 参照)。

「呼ばれる者の声とする、『荒野に主の道を備え、さばくに、われわれの神のために、大路をまっすぐにせよ。もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。これは主の口が語られたのである』。

声が聞える、『呼ばわれ』。わたしは言った、『なんと呼ばわりましょうか』。『人はみな草だ。その麗しさは、すべて野の花のようだ。主の息がその上に吹けば、草は枯れ、花はしぼむ。たしかに人は草だ。草は枯れ、花はしぼむ。しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない』。(イザヤ 40:3-8)。

声によって、高低が「平らに」されるとき、「主の栄光」を「皆ともに」に見ることができるようになります。そして、主の栄光を見るとき、そのあとに「人はみな草だ」、「しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない」というメッセージが続きます。この神のみ声を一つ一つ受け入れて進むとき、完全な回復、万物更新が成し遂げられるのです。

「信仰による義認とは何か？それは人間の栄光をちに伏させ、人が自分自身のために自分ではできないことをなす神の働きである。」(牧師への証 456)

「人間の栄光がちに」伏されるときに、神の働きを成し遂げるのは神のみ言葉です。「はなはだよかった」いにしえを創造したのも、神のみ言葉でした。

エリヤはこの「神の言葉はとこしえに変わることはない」ことを信じて、改革の働きをしました。バプテスマのヨハネも同じです。イエスの再臨に民を備える「残りの子ら」も同じです。そのみ言葉を告げる「声」によって、その働きが成し遂げられたのでした。

そうです、神のみ声は、始めから最後まで、ご自分の子らと呼んでいます。

「彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音(声)を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』。彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』。(創世記 3:8-10)。

「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また、聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙示録 22:17)。

どうぞ、この声をそのまま聞くことにより、神の栄光が現れますように。完

しはきょう夢で、あの人のためにさんざん苦しみましたから」と書いてありました (マタイ 27:19)。

ピラトはこの知らせに青ざめました。しかし、暴徒たちは彼の優柔不断を見て、ますますせき立てました。

ピラトは何とかなければならないと思いました。過越(すぎこし)の祭の時には、囚人を一人釈放するのが慣例になっており、その人を人々が選ぶのでした。ローマの兵卒たちは最近バラバという名高い強盗を捕らえていました。彼は墮落した悪党で、殺人者でした。そこでピラトは群衆に向き直り、非常な熱心さで言いました。

「おまえたちは、だれをゆるしてほしいのか。バラバか、それとも、キリストといわれるイエスカ」 (マタイ 27:17)。

彼らは答えて「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」 (ルカ 23:18)。

ピラトは人々の訴えに驚きと失望であ然となりました。彼は自分自身の判断を明け渡し、民に訴えることによって、尊厳(そんげん)と群衆の統制力を失いました。そのあと彼は暴徒の道具にすぎませんでした。彼らは意のままに彼を揺さぶりました。それから、彼が尋ねました。

「それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいのか」。

彼らは異口同音に叫びました。「十字架につけよ」。

「ピラトは言った、『あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか』。すると彼らはいっそう激しく叫んで、『十字架につけよ』と言った」 (マタイ 27:22, 23)。

「十字架につけよ」との恐ろしい叫びを聞いて、ピラトの頬は青ざめました。彼はこんなことになろうとは考えていませんでした。彼はイエスさまが無実であることを繰り返し断言しました。それでも人々はこのお方が、このもっとも悲惨で恐ろしい死を受けなければならないと決めていました。ピラトはまた次のように質問しました、「では、この人はいったいどんな悪事をしたのか?」

すると再びひどい叫びが上がりました。「十字架につけよ、十字架につけよ」。

ゆず巻き大根

■材料

大根	10 センチ
ゆずの皮	2 個分
粗糖	適量
レモン汁	適量

■作り方

1. 大根を薄くスライスして、柔らかくなるまで天日干しをします（一日ほど）。
2. ゆずの皮を大根の幅に合わせて千切りにします。
3. ゆずの皮 2, 3 本を大根で巻いて、巻口を下にして容器に重ねて詰めます。
4. その上に粗糖とレモンをかけて数日置きます。
5. 味がなじんだら、楊枝に 3 つずつ刺します。

いるどりも鮮やかで、お正月のごちそうにも合います。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第46話

ピラトによる有罪宣告(1)

ユダヤ人がヘロデのもとから戻ってきて、救い主を再びピラトのもとへと連れてきたとき、彼は非常に不愉快になり、そしていったい何をしてもらいたいのかと彼らに尋ねました。わたしはすでにイエスを調べたが、彼の中に何の過ちも見つけることができなかったのだと彼らに注意しました。おまえたちは彼について苦情を訴えてきたが、その告発の一つも証明できなかったのではないかと告げました。

前の章で述べたように、彼らはこのお方を、彼ら同様にユダヤ人であるヘロデのところに連れて行きましたが、このお方のうちに死罪に値するようなものを何も見つけることができませんでした。しかしピラトは告発者たちをなだめるために言いました。

「だから、彼をむち打ってから、許してやることにしよう」(ルカ 23:16)。

ここでピラトは自分の弱さを表しました。彼はキリストの無実を認めて

いたにもかかわらず、なぜこのお方を罰するべきなのでしょう。それは悪との妥協でした。ユダヤ人は裁判の間中、これを決して忘れませんでした。彼らはこれまでローマの総督をおどしてきましたが、今やイエスさまの有罪宣告を獲得するまで、優勢にたって押し通すのでした。

群衆はますます大声で囚人の命を求めて叫びました。

ピラトがどうすべきかをためらっている間に、妻からの手紙が彼の下へ届きました。そこには「あの義人には関係しないでください。わた



(45 ページに続く)